

## 可觀小説卷卅三

## 一、山崎庄兵衛の名譽

大將知人事奇妙なる事也。加賀大納言利家卿、いまだ又左衛門とて金澤城に居給ふ時に、越中の太守佐々内藏助成政と弓矢に成り取合給ふ。越中木船の城を利家攻給ふ時、旗本は十町餘脇に備らる。然處に利家の先手敗北して、城門より下の田中迄二町餘崩れ來る。城よりも多勢追て出る。利家見給ひ、扱々大崩する事哉、先手に山崎庄兵衛が居ば、最早可反はず成が、いな事と被申候。如案誰とは不知武者一人、敗卒の中より反し候と、加州勢どつともり返し、敵を堀際迄追入。暫時して先手より鳥毛羽織の使者乗切て來り、さき手追立られ候をもり返し勝申候と注進す。利家聞給ひ、誰が返したるぞと問給ふ。使番云。山崎庄兵衛一番に返し、鎗を入れ突返し候と云。利家卿、左様に可有之と宣ひしと也。名譽の事共と人々感ぜし。

一、利家卿名護屋陣替の事

高麗陣の時肥前名護屋にて、家康公御陣取の下に清水あ

り。諸大名より御斷を申て汲む。餘り汲に付、家康より仲間を被付、その後は餘り汲ませず。六月末にて清水の涌事少く候時、加賀大納言利家卿の陣より、十二三人づれにて水汲に來る。番人出て、水多からず汲事無用と云。利家衆は是非汲まんと旬る。既に色めくをみて、利家卿より侍共十人、二十人充走集り、少の間に一二千許も聚る。家康陣よりも若侍ども千餘罷出、弓・鐵炮を立て鐘の鞘をはづしひしめき候に付、本多中書忠勝・榊原式部康政・松平和泉眞乘等十人許出合ひ、喧嘩を押ゆる。忠勝は澁手拭にて鉢巻し、式部は大はだぬきに成、兩方の間に割入り、互に高聲にて問答數刻に及ぶ。家康は御涼所の亭へ上り、此手柄と號する御腰物をさゝれ御覽あり。鐵炮頭服部半藏と渡部忠右衛門は鐵炮三百挺召連れ、喧嘩の場へは不來、利家の陣所の裏門の前へ詰懸、事出來せば利家本陣へ可取掛躰なり。此事利家陣より喧嘩の場へ通じ候哉、次第々々に兩方引別れ候。太閤御意にて、其後利家卿へ陣替被仰付、互に遠く成候。

此事與高徳公夜話所載宜參考

## 一、前田利常の乘馬優婆塞

越前少將忠直謀叛の風説有之時、加賀筑前守利常卿隣國なれば、御先手可被仰付との沙汰也。利常御召に可成武具下の御馬なし。依之百二十萬石の家の中より、二千餘疋の馬を出し撰たれどもなし。富田越後が馬に鹿毛にて二寸五分あり頭持・腕蹄・乗掛・かんさき無殘所を撰出す。されば物を見ざるかとして、城内の大庭に指物數百本立ならべ、其内を乗廻し指物を起臥するに、耳立・足並少も不違、弓鐵炮にも不怖故是を乘馬に定らる。名を優婆塞と付たり。今一匹乗替をと撰れしに終になかりしと也。良馬は稀なるもの也。

## 一、成田助九郎が浅井暁の役談

賀州小松浅井暁の戰、諸書に記すと云へども誤多し。我成田助九郎に逢て、直談を聞に因てこゝに記す。抑此合戰は或は九月九日と云ひ、或は八月八日と云。成田語るは八月八日也。加賀肥前守は小松城主丹羽五郎左衛門長重押しとして、三道山には岡嶋備中を置く。八月三日より大正持を攻ん爲に、小松の南三谷海道へ人數推出す。丹羽長重は惣構へ出で、町屋の上に登り見之。肥前守利長の大軍、東は手

取川・三道山より三谷に至て推繼ぎ、野も山も皆旗也。諸軍懼るゝ色みえ候。坂井與右衛門聲をいらゝけて云。勝負は大將に在て人數の多少にあらず、少もこはき事なしといさむる。長重は古田五郎兵衛等百四十餘を浅井口へ遣し、又櫻木助左衛門八十挺の鐵炮を、潟の海へ遣し船に載せ、上方より利長の後陣を撃んとす。利家後備は前田孫四郎利政・高山南坊前高州高橋城主高山右近是なり兩備は早々歸馬村へ取込申候。古田・櫻木勝に乗て頻に射立候。利長は小松勢後陣へ取懸るとみて、立止り馬より下り、床机に腰を懸て備被申候。其時長重は南部無右衛門・寺澤勘右衛門を物見に遣し、利長旗下を爲見被申候。高山南坊見之て小松の者物見に不馴、あれ撃取候へと下知仕候。馬武者七八騎乗出候。初め小松方古田・櫻木打出候時、若し利長の人數今井橋の方へ推廻候はゞ、我等は跡を取きられんとて、馬武者五六騎鐵炮二十挺、御幸塚の方へ出し置けり。物見の南部・寺澤見渡して、利長人數を今井橋へ廻し、小松の城取懸候と致注進候。小松城中大に騒動す。長重はいまだ町屋の屋根に被居候が、南部・寺澤が注進に付て使番を遣し、潟へ出張たる古田・櫻